

し、居住地を追われて着る物もなく食料も金もなく、無一物で西に東に流浪の旅に立つよりほかはないという窮地になりました。それは言葉では言い表すことができないくらいのことでした。

私たちは、二十年十月には、第二の故郷と定めて五百余人の村作りの根を下ろしていた三合屯の開拓地を明け渡し、二十キロ離れた熊本県出身の東洋開拓団に合流し、お世話になりました。

各人が鹵を食いしばって故国引揚げまでをなんとかして生き抜こうと頑張っていたのですが、衣類が無く、食料も無く、病気になるっても薬はありません。このようにときに発疹チフスのまん延に、ほどこすすべもなく、この間に老年、幼児を始めとして多くの団員家族達が何があんでも日本への引揚げまでは生き抜くのだと必死の叫びをあげながら、次から次へと死出の旅路へ立つのでした。

周圜皆敵の中に生きる日本人の哀れにも悲しい諦めの人生行路でした。それでも私たちは絶対無抵抗主義に徹して、冷静に中国の終戦後の大混乱時期を見つめていき

ました。

私たちは、昭和二十年末日本へ引揚げてきましたが、一般の引揚者とは違い、渡満時、日本にある財産の処分をして家族ぐるみの渡満でした。日本に帰ってきてもまったく拠点が無く、寄りかかる何物もたないという人達がほとんどであって、困難をきわめるものでした。

扎蘭屯逃避行

愛知県 大原 芳 鐘

ソ満国境満州里にいたる興安嶺山麓の扎蘭屯の満拓公社で終戦の詔勅放送を聞く。

八月十日頃、扎蘭屯にも満州里、免渡河、等の奥地の軍や、鉄道関係の家族が避難してきて、官舎や社宅等に分宿しておりましたが、二、三泊してハルビン、新京方面に南下しました。

その頃、鉄道関係から満拓にも「避難しませんか」という誘いがありました。開拓団を置いて自分たちだけ

避難できない、と辞退しました。八月十五日、日本人男性は各機関共、各部所に一人ずつ残し、全員現地召集を受け、事務所は女と満人と主務者だけになっていました。その後、街長（町長）の呼びだして、いつ避難があるかもしれないから準備するようにと連絡。

翌十六日早朝には、正午に駅に各隣組ごと避難、チチハルに向け南下、という命令でした。女と子どもばかりの社宅でしたが、急きよ身仕度、誰もがリュック一つで握り飯を持って駅へ行く。早朝から昼までの私は、社員家族に給料の前渡し、家族を送り、私自身残留することになっていたので、公社の書類関係を詰めたリュック一つで、私物は何一つ持たず、着たきり雀でした。

駅に集合した日本人全員は、特別列車で午後一時頃札幌屯を離れました。

その時、現地召集を受けた人達が戻ってきました。社員はいちおう、事務所に集まり、今後の方針を協議中、ソ連軍の戦車部隊がはいつてきた。誰も身の危険を感じました。

トラックを準備して、私が社宅を見にまわっている間

に、ソ連軍戦車はいなくなりました。私が準備した公社の書類関係のリュックを先行便で持って行ってくれたのは幸いでした。大きな小山みたいなソ連の戦車が目の前を通ったときの恐怖、私は公社の筋向いにあった独立守備隊に走って行き同行を頼みましたが、日本の兵隊も二両のトラックに立ったまま、満杯で走り去りました。

その日札幌屯に残った日本人は、私、省公署副長、警察副署長、銀行支店長、他一人の五人。

残った五人は、当夜は鮮系小学校長宅に。翌朝、馬車を用意、全員出発したが、飛行場を通らねばチチハル方面に出られぬため、飛行場へ行ったものの、そこにはソ連軍の戦車や兵士で一杯、けっきょく、通過できず追いつ返されて、ソ連軍の司令部に連行。

夕方近く札幌屯に近い開拓団の家族が牛車で避難してくる、鉄道線路づたいに、ぼつぼつと国境方面から単身ポロポロになって避難してくる人、絶え間なく。死んだ子どもを背に、放心状態でたどり着いた母親。銃で撃たれた足を引きずりながらモンペはずたずたで、乞食姿で着いた人、足の傷には虫がわいている。

主人を召集されて身一つで逃げてきた人が多く、水を得てのんでやっとたどり着く。

日ならずして官舎は満杯になり、(約三百人ぐらい)毎日食料の調達にたいへんでした。官舎は避難民収容所となり、ソ連軍の兵隊が、一戸に常駐、監視にあたってました。老人、女、子どもは南下させるが良いと司令部に交渉、日をへてチチハルへ三十人ぐらいずつ送り出しました。

チチハルにおける難民生活は、二十一年八月の引揚げまでの間、誰もが栄養失調におちいり、弱い人はつぎつぎと亡くなり、加うるに、発疹チフスが流行し、子どもはほとんど死亡。おとなでも、体力の無い人は亡くなり、おたがい、自分の命を守るのに精一杯、どうすることもできなかった。一年間着たきり、風呂にはいることすらできない。暑い日に洗濯して干し、またそれを着る。二十一年の三、四月頃は毎日誰かが葬られました。

八月十六日、私が社宅を見まわりに行ったとき、社宅の扉はこわされて、部屋中無残なありさまでした。押入れのふとん、衣類、全部が荒らされて、天井裏までこわ

されていました。満州全体、あらゆる街が泥棒市場で、日本人の衣類がはらんし、売買されていました。

十五歳の開拓義勇軍勇士

大阪府 田口 久太郎

昭和十七年、国民学校高等科在学中、先生から満蒙開拓青少年義勇軍のことを聞かされ、北辺の鎮護、食糧の増産、国にご奉公ができることがあればと思つて、親の反対はあつたが、将来の安定を考えて志願した。学校では、先年にも義勇軍を送出しており、当時学校から、同期五人参加したと記憶している。当時私は満年齢十五歳だった。学校では壮行会を開いて、出征兵士を送るのと同じように、日の丸の小旗を打ち振り、盛大な見送りを受けて、義勇軍訓練所のある茨城県内原に出発した。内原訓練所に、大阪から一個中隊、三百余人で入所し、満州開拓に必要な訓練を受けることになった。開拓に行くのだから農業に関する訓練、開墾、松の根っこ起し、